

2020 年 1 月 19 日（日）「絡み合う罪の向こうに」

マタイ 27:11-26（その 1）

11 さて、イエスは総督の前に立たれた。すると、総督はイエスに「あなたは、ユダヤ人の王ですか」と尋ねた。イエスは彼に「そのとおりです」と言われた。12 しかし、祭司長、長老たちから訴えがなされたときは、何もお答えにならなかった。13 そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにいろいろとあなたに不利な証言をしているのに、聞こえないのですか。」14 それでも、イエスは、どんな訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。

15 ところで総督は、その祭りには、群衆のために、いつも望みの囚人をひとりだけ赦免してやっていた。16 そのころ、バラバという名の知れた囚人が捕らえられていた。17 それで、彼らが集まったとき、ピラトが言った。「あなたがたは、だれを釈放してほしいのか。バラバか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」18 ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことに気づいていたのである。

19 また、ピラトが裁判の席に着いていたとき、彼の妻が彼のもとに人をやって言わせた。「あの正しい人にはかかわり合わないでください。ゆうべ、私は夢で、あの人のことで苦しいめに会いましたから。」

20 しかし、祭司長、長老たちは、バラバのほうを願うよう、そして、イエスを死刑にするよう、群衆を説きつけた。21 しかし、総督は彼らに答えて言った。「あなたがたは、ふたりのうちどちらを釈放してほしいのか。」彼らは言った。「バラバだ。」22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしようか。」彼らはいつせいに言った。「十字架につけろ。」23 だが、ピラトは言った。「あの人がどんな悪い事をしたというのか。」しかし、彼らはますます激しく「十字架につけろ」と叫び続けた。24 そこでピラトは、自分では手の下しようがなく、かえって暴動になりそうなのを見て、群衆の目の前で水を取り寄せ、手を洗って、言った。「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」25 すると、民衆はみな答えて言った。「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい。」26 そこで、ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスをむち打ってから、十字架につけるために引き渡した。

【序論】

毎週唱和しております使徒信条の中に「主は…ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という一節があります。私たちはこれをどういう認識をもって唱えているでしょう

か。使徒信条の中に出てくる数少ない固有名詞の一つに（あとはイエス・キリスト、マリヤのみ）、このローマ総督の名前が載せられているのです。「大祭司カヤパのもとに」としても話は通じたかもしれませんが、しかし、ここでは敢えて異邦人であるピラトが選ばれている。このようにして、ピラトの名前は未来永劫、人類史に忘れられぬものとして刻まれてしまいました。主イエスを十字架に送った（最終的な判断を下した）人物として、「不名誉」な名前を私たちも唱えているのです。仮に私の名前が毎週世界中でそのように唱えられていたとしたら、私はこの世に居場所を見出すことができなくなるでしょう。それほど重みのある言葉として、私たちはよく理解して唱える必要があるのではないか。今日はその意味を探りつつ、与えられた御言葉に取り組んでまいりたいと思います。

【本論】

本論 1. ピラトの尋問

さて、イエスは総督の前に立たれた。（27:11a）

最後の晩餐→ゲッセマネの祈り→捕縛→大祭司カヤパの邸宅における非公式の裁判→朝一番の公式のサンヘドリンの裁判→ピラトによる裁判

このような流れでストーリーが展開してまいりました¹。一睡もせず、極度の疲労のなかで、主イエスは世の権力の前に立たされたのです。

「総督」とはポンテオ・ピラトのことで、この当時ローマの属州であった（サマリヤとイドマヤを含む）ユダヤの地方総督を務めていた人物です。彼は紀元 26～36 年の間、第 5 代総督としてその地方の政治を行ないました。その悪政については前回お話ししたとおりです（No. 188「血の畑」参照）。

総督は、普段はカイザリヤに駐屯していましたが、ユダヤの重要な祭がある時期には巡礼地エルサレムに来て、軍隊を配備して治安を守りました。人が多く集まると暴動が起こる可能性があったからです。サンヘドリンが夜のうちにイエスの裁判を決行したのは、ピラトがエルサレムに居る残り時間が限られていたからだと思われます。どうにか朝の早い時間帯に彼をつかまえて裁判を行なわせなかった。何か、サンヘドリンの焦りのようなものを感じませんか。その隠れた動機には、サンヘドリンが自らの手でイエスを処刑したくないという意図があるように思われます。今やユダヤ人の間で評判のイエスを殺したとあっては、民衆を敵に回すかもしれない。それゆえに、彼らはローマ人の

¹ ヨハネは最初に祭司長アンナスによる裁判があったことを記録している（ヨハネ 18:13-14）。

手でイエスを処刑しようと画策^{かくさく}したのです。ここにはある種の責任転嫁^{てんか}がある。

すると、総督はイエスに「あなたは、ユダヤ人の王ですか」と尋ねた。イエスは彼に「そのとおりです」と言われた。(27:11b)

「あなたは、ユダヤ人の王ですか」という訳では、この問いの意味が読者にほとんど何も伝わらないでしょう。ピラトは「お前は政治犯なのか？」と問うているのです。このようにピラトが問う背景には、彼がサンヘドリンから聞かされた告訴内容があるでしょう。先の深夜の非公式の裁判において、大祭司は主イエスに「あなたは神の子キリストなのか」と問うた(26:63)。それに対して主イエスは「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言うておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを見ることになります」(26:64)と答えました。この回答によって、主は冒瀆罪^{ぼうとくざい}でユダヤの法廷において死刑が言い渡されたのです。ただ、これはあくまでもイスラエルの宗教上の罪状であって、ローマ法においては死罪には当たりません。そこで、サンヘドリンはどうかイエスの発言をローマ法に抵触^{ていしよく}するよう言い直し、政治犯となるよう「この男は自らをユダヤ人の王と名乗り、民を煽動^{せんどう}し、ローマ帝国に反乱を企てている」と訴えたのです。ルカは実際のサンヘドリンの陳情^{ちんじょう}を記録しています。

そしてイエスについて訴え始めた。彼らは言った。「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」(ルカ23:2) この訴えの内容がほぼ偽りであることは、主イエスのこれまでの教えと御業とを見れば明らかです。主イエスはむしろ王に祀^{まつ}り上げられることを拒否し(ヨハネ6:15)、カイザルへの税金は納めるべしと教えておられました(22:15-22)。ただ一点、「自分は王キリストだと言っている」という表現は微妙です。主イエスの自己認識は確かにそうであった。しかし、公然とそのように主張してきたわけではありません。神の国の王として、むしろ神として、暗にご自身を示してこられた面があった。神の子であることが分かるような発言を繰り返しておられたのは事実なのです。ただ、ローマ帝国に反乱を企てる中心人物だというサンヘドリンの主張とは、まったく相容れぬものでした。

ピラトはあくまでも「お前は政治犯なのか？」と問うているにすぎません。むしろ、ピラトから見たイエスは、百歩譲^{ゆず}ってもそのような暴力性を秘めた男には見えなかったのです。よって、彼は「お前のような男がユダヤ人の王だと言うのか？」と嘲笑^{ちょうしょう}しているのだと思われます。

主イエスはそれに対して「そのとおりです」と答えたとありますが、これも原文では「あなたは言う」という表現が用いられていて、「あなたがそう言うならそうなのかもしれない」という極めて微妙な言い方なのです(新改訳2017「あなたがそう言っています」)。頭からピラトの問いを承認しているわけではありません。

本論 2. イエスの沈黙

しかし、祭司長、長老たちから訴えがなされたときは、何もお答えにならなかった。そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにいろいろとあなたに不利な証言をしているのに、聞こえないのですか。」それでも、イエスは、どんな訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。(27:12-14)

ここでも例の沈黙があります。サンヘドリンの連中が偽りの証言を並べ立て始めると、主はジッと黙るのです。これは、先のカヤパの邸宅での裁判においても同様でした(26:63)。弁護人がいない主イエスにとって、自分の身を守る唯一の手段は、自ら真実を主張することでした。しかし、主はそれをなさらないのです。ローマの裁判官は、弁護されていない者に対して判決を下すことを好まなかったようです。また、法廷としては有罪判決を下す前に、被告に3回弁明する機会を与えるのが当時の慣^{ならわ}しでした。大抵の被告人は、少しでも自分に有利になるように、知恵を絞って弁明したことでしょう。これまでもピラトは何度もそのような裁判を受け持ってきたはずですが、このイエスという男はかつて見てきた囚人とはまったく違う。何を言われても口を開かないのです。

最近、学習のために旧約続編を読んでいるのですが、聖書の正典には含まれていない一群の書になりますが、中には驚くべき知恵が散りばめられていて、一読の価値があります。その中の一節を紹介させていただきます。

彼は語るべき時が来るまで、口を慎む。そうすると多くの人々は、彼の思慮深さを伝え広める。(シラ書 1:24)

この言葉は、まさに主イエスに完全に当てはまるでしょう。主は沈黙をもってご自身の知恵を明らかにされた。人は多くを語れば語るほど泥沼にはまっていく傾向があります。その言葉の真実性が疑われ始めるのです。そして、それを覆い隠すためにもっと多くを語る。この時の祭司長、長老たちの陥っていた状況です。主イエスは沈黙をもってその場を統治しておられたのです。そして、主の念頭にはイザヤ 53:7 の聖句があったと思われまふ。

彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

主はご自分をイザヤ書 53 章の「苦難のしもべ」と重ね合わせ、その預言のとおりになる舞っておられたのです。そして、その様子を見ていた人々が、後になってこの預言と主イエスの姿の一致を見出し、福音書に書き留めたのです。

ピラトもまた、訴える者たちの言葉が疑わしいことに気づき始めていました。その証

拠に、18 節では「ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことに気づいていたのである」と言われています。そもそも、ユダヤ人が同胞を死刑に定めるためにローマ人の法廷に突き出すということ自体がおかしいではありませんか。その告訴内容が、ローマ帝国への反逆を企てる政治犯だという言い方からして、理不尽であります。なぜなら、そういう政治的指導者はユダヤ人に歓迎され、英雄視されるからです。この後、15 節以下に登場するバラバという人物は、おそらく武力行使によってローマ兵を殺害した^{かど} 廉で捕えられたのだと思われます。彼が殺人者であるにも拘らず^{かかわ} 民衆に釈放を願われるところには、彼がユダヤ人の英雄として扱われていたからでしょう。だからこそ、イエスがローマに対する政治犯であるならば、ユダヤ人が彼の処刑を求めて帝国に突き出すことは、理に^{かな} 適わぬ話だったのです。ピラトはその論理的^{ふ せいごうせい} 不整合性に気づいたのです。

本論 3. バラバの身代わり

ところで総督は、その祭りには、群衆のために、いつも望みの囚人をひとりだけ赦免してやっていた。そのころ、バラバという名の知れた囚人が捕らえられていた。それで、彼らが集まったとき、ピラトが言った。「あなたがたは、だれを釈放してほしいのか。バラバか、それともキリストと呼ばれているイエスカ。」(27:15-17)

さて、ここにかのバラバが登場します。「バラバ」とは「バル・アッバス」(アッバスの子)という名前であり、「父の子」「教師の子」という意味を持ちます。このことから、彼は著名なラビの息子だったのではないかと想像する人もいます。そうだったのかもしれませんが。彼は強い愛国心から、ユダヤを属州に置いているローマ帝国を憎み、仲間を集め、暴動を^{おこ} 興したのでしょう。そのときに彼はローマ兵を殺害したのだと思われます。マルコ、ルカはそれぞれ次のように描いています。

- ・ たまたま、バラバという者がいて、暴動のとき人殺しをした暴徒たちといっしょに牢に入っていた。(マルコ 15:7)
 - ・ バラバとは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入っていた者である。(ルカ 23:19)
- つまり、帝国側からすると、バラバに対しては明確な処刑の理由があったわけです。この男を生かしておくことは帝国にとって危険でした。

ピラトが祭のたびに囚人を一人釈放することを慣^{ならわ} としていたという言及があります。これは、扱いにくいユダヤ人の好意を得るためにピラトが考え出した慣習でしょう。政治をうまく回すために、民衆が喜ぶことを一つしてやる。飴^{あめ}を与えて大衆の心をつか^{つか} む。このようなご機嫌取りのような政治を行なっていたところにも、ピラトの迎合的、優柔不断な性格が現れていると言えるでしょう。

彼が犯した大きな判断ミスは、本来二者択一^{にしゃたくいつ}にはできないはずの二人を並べて、群衆に選ばせたことです。バラバは殺人を犯した犯罪人であり、主イエスはまだ罪が確定していない（おそらく白の）容疑者であります。ピラトの算段^{さんだん}では、群衆は「キリストと呼ばれるイエス」の方を選ぶと思ったのでしょう。いや、むしろイエスを選択してもらいたくて、このような質問をしたのです。そもそも、これは群衆に問かけけるような事柄ではありません。有罪は有罪、無罪は無罪と、毅然^{きぜん}と判断するのが裁判官ではありませんか。しかし、彼はこの後、ずるずると群衆の言いなりになっていってしまう。そして、半永久的に「愚かな裁判官」として歴史に名を残す者となってしまいますのです。

この後のピラトの失態については次回扱うことにいたします。結論として、彼はバラバを釈放し、イエスを十字架へと送ってしまう。数多くの写本には、このバラバという人物に「イエス」という名前が付けられているようです。新共同訳でも新改訳 2017 でも「バラバ・イエス」と訳されています。イエスという名前はユダヤ社会では珍しくありませんでしたから、そうであったとしても別段不思議ではありません。仮に「バラバ・イエス」であったとすると、ここには二人のイエスが並べられていることになる。そのうちの一方は罪に定められ、他方は釈放されるのです。読者は本来どちらが釈放されるべきであるか、分かっているでしょう。「キリストと呼ばれるイエス」こそ、無罪放免にならなくてはならないのです。ところが、事態は正反対へと向かっていく。人間の誤った判断によって。ピラトの判断力のなさ、あくまでも自分を守ろうとする姿勢によって、主イエスが犠牲になるのです。しかし、そのようなとんでもない冤罪裁判^{えんざい}は、結果としてもう一人のバラバを生かすことになる。バラバだけではありません。私たち読者一人一人を生かすことになるのです。人間の罪・過ちが絡み合いながら、神の聖なるご計画が成就していくのを、私たちは見るのであります。

【結論】

冒頭で、使徒信条でなぜポンテオ・ピラトの名前が出てくるのかを問いました。この信仰告白は、確かにピラトの罪を明らかにしています。しかし、ピラトを蔑^{さげすみ}み、何度も断罪するために唱えているのではないでしょう。むしろ、ピラトの内に自分自身の弱さを見出すではありませんか。ピラトの名前を自分の名前に置き換えてもよい。「主は奥村喜樹のもとに苦しみを受けた」のです。そして、バラバの身代わりとなったように、私たちの身代わりともなられた。私たちは、ピラト、バラバの内に自分自身を見出すことができる。彼らは人類の代表であり、私を、あなたを表しているのです。

【祈り】

正義を愛し給う神よ。ピラトによる十字架裁判の不当性が明らかにされた箇所でした。原告にも裁判官にも真実が存在しない中であって、ただ一人、主イエスの内には真実がありました。そして、主の沈黙がそれを表していました。私たち人間は言葉において罪を犯します。これらの人々を他山の石とすることはできません。主が他ならぬ私たちのために黙しておられるという視点に立ちます。そして、主が身代わりに命を救ってくださったバラバの内に、自分自身を見出します。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
真実を愛し、偽りを退け給う、父なる神の愛、
沈黙をもって、不当な裁判を支配し、苦難のしもべそのものとなって、耐え忍び給うた、
主イエス・キリストの恵み、
ピラト、バラバの内に自らを見出し、主の憐れみにすがらせ給う、聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。